

カーテンを開けて朝日を浴びる朝が好きです。
俳句も続けたい。旅行もしたい。
阪神の試合も観戦したい

大阪(ゆうゆうの里) 浅野恭子様(87歳) 令和3年1月 一人入居



温厚篤実な主人と出会って

西宮で青春時代を過ごしました。兄二人の末っ子で、兄とは一緒に阪神の応援にも行きました。友人のお姉さんがお花の先生をしていて、私はその生徒だったのですが、知り合いが「息子のお嫁さんを探している」と、紹介されたのが主人でした。

主人の性格は温厚篤実。話しやすく優しい人でした。主人は銀行員で、転勤



入居者のご友人と鶴見緑地のひと時を楽しむ浅野様(左側)

は覚悟していましたが、全て近くの転勤で済みました。最後は八幡市に落ち着きました。主人は多趣味。学生時代の友人とゴルフを続けており、コンワイにも連

れて行ってもらいました。二人とも大の阪神ファンで、いつも揃って甲子園球場に応援に行ったことも懐かしいです。

俳句は40年くらい続けています

長く続けている趣味に俳句・俳画があります。主人の友人の奥さんに句会に誘われたことがきっかけとなりました。主人の友人の奥さんのお姉さんで、俳句の本を出すほど立派な方がいました。その方が歳時記を用意して、初心者にもわかり易く教えてくれたので、続けられました。

句会ではお互いに批評するので、喧々諤々の時もあります。絵のようには綺麗なものでもダメ。でも教える先生によっても違うからそれも難しいところ。それでも俳句は、発表する場があるからこそ続けられます。コロナになつてからはホテルや公民館などが借りられなくなつて、対面の句会が開催できなくなりました。句を送つて選句して票の数を競う、通信教育みたいになつてしまいましたが、最近では漸く4、5人で集まれる

主人の13回忌を終えて入居しました

ようになりました。

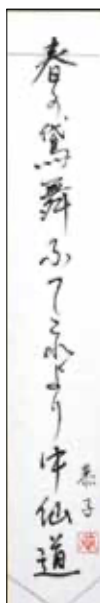
老後のことについては、子供がいないので、主人ともよく話をしていました。主人の叔父夫婦が信楽の老人ホームに入っており、「寂しい」というので主人と二人で面会にも行きました。そのとき「ホームっていうのはそんなに寂しいものなのか」と話をしたことがあります。しかし、時代とともに、老後の生きがいや賑わいのある暮らしを大切にする自立入居のホームも現れてきました。私は、なるべく早くそういうホームに入りたいなと思っていました。主人はあまり乗り気ではありませんでした。友人が多い人だったから、その交流を続ける生活から離れるのが嫌だったのでしょうか。だから、なかなか話はまとまりませんでした。

本気でホーム探しを始めたのは、主人が亡くなつてからです。神戸や大阪の施設を検討

しました。寝屋川にある俳画教室に通つていたので、京阪沿線なら乗り換えをしなくてもよいと思い大阪(ゆうゆうの里)に決めました。気に入つたお部屋に巡り合うことができたことも大きかったです。主人の13回忌を終えての入居となりましたが、85歳まで健康でいられたお陰と主人に感謝しています。

施設での新しい体験は俳句作りの滋養になります

私のお部屋から生駒山の山並みが見えます。朝起きてカーテンを開けると朝日を浴びることができ、おかげで何より元気になります。入居して生活が規則正しくなりました。入居してから、サークルやアスレチックジムのトレーニングに通うようになりました。個人でやっている時と違って、仲間が待っていると思うと、何があつても「行こう」となります。サークルは、コーラス、民謡、太極拳などを続けています。施設の動画上映会や食堂のボージョーヌライブの解禁のイベントも嬉しいです。施設での新しい体験は、俳句づくりの刺激になっていきます。健康でこそ長寿ですから、これからも和氣藹々と過ごしたいものです。



展示会に出展された浅野様の俳句